

2018年3月29日

財務大臣 麻生太郎 様

公益社団法人 日本建築家協会 (JIA)
関東甲信越支部 支部長 藤沼 傑
同 保存問題委員会 委員長 加藤誠洋
同 中野地域会 代表 小西敏正

旧豊多摩監獄正門の保存に関する要望書

拝啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

貴省におかれましては我が国および地域の発展のため日々ご尽力なさっていることに、弊会としてここに敬意を表します。

さて、このたび法務省から貴省へ所有権移転の運びとなった、旧豊多摩監獄正門（中野区新井3丁目、旧矯正研修所東京支所敷地内）につき、その文化財としての稀に見る高い価値に鑑み、以下のように要望いたします。

我が国における煉瓦造建築の中でも最も水準の高い作品の一つと言われた旧豊多摩監獄（後の中野刑務所）は、旧司法省に在籍した建築家 後藤慶二の設計・監理によって1915(大正4)年に竣工、その後1983(昭和58)年の刑務所廃止の際、日本建築学会からの要望などにより、その正門だけが解体から外されました。この正門は、監獄開設当初からの煉瓦造の姿が非常に良い状態で保存されており、既に1世紀を経た、貴重な歴史的建造物となっております。

後藤慶二は1906(明治39)年に東京帝国大学建築学科を卒業、すぐに司法省に入り、営繕技師としてこの旧豊多摩監獄の建設に長く専従することになりました。監獄という冷徹な機能に忠実に従いながらもその空間に深い精神性を与え、ストイックな外観にはロマンチックとさえ言える表情を与えました。現場にも長く通い詰めて、囚人たちの焼いた煉瓦を、類を見ない密度の高い作品へと昇華させました。後藤は満35歳の若さで夭折したため、この正門が後藤の唯一の現存作品となっております。

残された正門は、小品ながらも煉瓦の積み方に及ぶ細部の全てに後藤の細やかな配慮が込められ、その造形的バランスの妙とともに、旧豊多摩監獄という後藤の作品の水準と、後藤自身の並々ならぬ熱意とを如実に証言しており、日本の近代建築史にとって、最も重要な遺産の一つと言って過言ではありません。後藤は教職なども兼任し、また建築構造分野などにも研究の成果を残しましたが、後世に継承すべき彼の遺産はこの正門に集約されます。

社会史的観点から見ても、1925年の治安維持法制定の結果、この監獄が政治犯・思想犯を主たる囚人とするという特異性を持つことになったため、残されたこの正門には、戦前・戦中に思想を弾圧する収容施設が存在したことの生きた証としての、代えられない価値があります。

以上のように、その建築的・文化的・歴史的価値の重要性・希少性に鑑み、旧矯正研修所東京支所の敷地の貴省からの売却に際しては、地元行政庁である中野区とも協力され、この旧豊多摩監獄正門を保存し後世へ残すための具体的措置をぜひともご検討くださるよう、たつてのお願いをする次第です。

なお、公益社団法人 日本建築家協会関東甲信越支部、同 保存問題委員会、同 中野地域会といたしましても、出来る限りの協力をさせていただき所存であることを、お伝えしたいと存じます。

敬具

